

---

---

## ホットニュース(平成14年度／第56号)

---

---

### ●今月の業界ホットニュース／丸ビルのオープン

新たにオープンした丸ビルが、大いに賑わっているという。皇居が箱庭のように、手に取るように眺望できる高層部の高級レストランが、連日予約で満杯らしい。東京駅直近の立地に恵まれ、地方からの予約も多いという。

これまでウィークデイのビジネス街としてしか機能していなかった丸の内地区を、休日にも楽しめる賑わい空間として再生しようとした試みは上手くいったようである。まだもの珍しさも手伝って、出入り客数は予測の倍に達しているそうだ。

東京駅周辺では、東西の駅前広場再整備計画も進んでおり、また丸ビルに次いで大規模ビル計画も数カ所が進められている。新たなビジネス拠点として、また新たな都市観光の拠点として、かなりの変貌を遂げることになりそうだ。

ただ丸ビルの開発をみて気になることは、相変わらず個別建物主義であることである。建物内部は懸命に工夫を凝らしているのだが、建物周りは閉鎖的で内部に入らないと賑わいが感じられない。せっかく1階には商業施設やコーヒーショップも入っており、これらが外に向かってオープンであれば、通りを歩いても街の雰囲気十分に楽しめるのではないだろうか。後続の開発には、通りへの十分な配慮をして、街全体の雰囲気づくりをしてもらいたいものである。

(代表取締役 堀田 紘之)

---

---

### ●PIARC C10ブダペスト会議に出席して

---

---

去る10月末に、PIARC C10(世界道路協会 都市内総合交通委員会)のブダペスト会議に出席した。今回の会議は、前回のブリスベン会議が本年7月にあつてから僅か3か月をおいての開催であり、その間の作業スケジュールはタイトであった。PIARC C10の活動内容については本年8月のホットニュースで記載したので詳細は省略するが、今回の会議は、来年10月に南アフリカのダーバンで開催される本会議に向けた作業と調整が主たる目的であったと言える。

ただし、今回のブダペスト会議では主要メンバーの欠席が目立ち、残されたメンバーが急遽代役となって作業のまとめを進めることとなった。英語セクレタリー、サブグループ2と4のリーダーが欠席し、サブグループ1のリーダーも2日目によく登場という事態であり、それぞれ代りの者が急遽代役をつとめたという点で、ワークショップとしての連帯感が生まれたようだ。また、日本側からは国土交通省街路課長が加わっている。今回のブダペスト会議は、地元ブダペストの方々を招いてセミナーを開催した点がこれまでの会議と異なっていた。これもダーバン本会議を想定したものであるが、通訳には今回のホストであるSzechenyi-Istvan大学のCsaba教授の関係者らしき地元の若いスタッフが対応し、今期(2000年～2003年)初の経済移行国での開催ということで、お隣のスロヴァキアからもBezák教授が参加した。

やはり、セミナーにおける質問は、こちら側が作成したまとめで提言した、経済移行国に見られる問題点について集中したように思う。これまでの会議では、経済移行国及び途上国からの参加者が少なかったため、これらの国々についてのまとめは途上国メンバーが代わりに検討している。原稿チェックを移行国や途上国メンバーに依頼しているとはいえ、直接こうして移行国のスタッフにチェックしてもらうということで、レポートとしての完成度が高まったことが成果として挙げられよう。

4年間という期間での作業なので、国によっては途中から参加できなくなるなどのメンバーも出てきており、残されたメンバーがそれを補っていかねばならない。その点で4年きっちりと対応できる体制が必要であることを痛感した。また、アジアからの唯一の会議参加国である日本としての責務も重要である。

※PIARCのHP(英語版)は <http://www.piarc.org> をご覧下さい。

(都市計画部 黒坂 剛)

---

---

### ●青年海外協力隊レポートvol.17

#### ～モロッコ最大のスペクタクル・サハラ砂漠

---

---

モロッコの南の国境線は、ほとんどがサハラ砂漠の中である。しかし、一口に砂漠と言っても、そのほとんどは実は何も生えない土漠である。モロッコの南部地方はそのほとんどが土漠であり、ところどころにオア

シスの村やカスバを中心とした村が点在する。何もない荒涼とした大地に忽然と姿を現す村々は青々とした緑に囲まれており、そこに水が存在することを知らせている。それを見ると、人も植物も水がなければ生きていけないのだということをまざまざと思い知らされる。

先日、モロッコ生活1年半余りにして初めて、サハラ砂漠へと足を踏み入れた。といっても、どこからがサハラ砂漠なのかはあまり区別はついていないのだが。土漠とは違って、砂漠はまさに、砂、砂、砂ばかりで、何十メートルもの高さの砂丘がいくつも連なっている。また、それらも風によって少しずつ姿を変えており、見るときによって砂丘の縁が鮮やかに切り立っていたり、丸みを帯びて見えたりし、二度と同じ姿を見せることはない。

砂漠の中で、いくつもの砂丘に囲まれていると、目標物が何もなく、距離感も方向感覚も失われていく。そんな中で、太陽を見、星を読んできた昔の人の知恵がどんなふうに生まれたのかがわかるような気がした。また、延々と続く不安定な砂地の中から安定した土漠へ出たときの安堵感、そこに水があり、人が住んでいるという喜び。砂漠の縁の村は、砂漠の旅に疲れた旅人をいろんな意味で癒してくれたことだろう。人を迎え、癒して、また旅立たせる。こんな繰り返しの中から生まれた村もあるのだということを見つけた。

(都市計画部 酒井 夕子)

アルメックホットニュース(平成14年11月15日発行)

////////////////////